

展景

季刊

No.69



2013年3月20日発行

通巻第69号 オンライン版第9号

無二の会

muninokai.com

目次

春を待つ〈俳句〉	岩田都女	3
多くして〈短歌〉	小野澤繁雄	4
東京観光〈短歌〉	河村郁子	5
鳥海山〈短歌〉	布宮慈子	6
人感電球〈短歌〉	丸山弘子	7
春の淡雪〈短歌〉	結城文	8
近江気まぐれ文学抄 38		
辻井喬『西行桜』『竹生島』	新関伸也	9
時間	松井淑子	11
〈那須通信 14〉植物事情	加藤文子	12
対詠「ごきげんいかが?」PART 45	丸山／布宮／小野澤	14
前号作品短評 A		15
前号作品短評 B		16
エッセイ教室「清紫会」の作品より		
或る所懐	池田桂一	17
片づけ	小野澤繁雄	18
雪掻き用スコップ	河村郁子	19
「清紫会」だより		21
無二の会短信		22
編集後記		24

春を待つ

岩田都女

待春のでんでん太鼓犬張子

春待つや山吹色の運動靴

寛永寺の鐘を聞きつつ冬牡丹

拍手かしはでに笹子立たせてしまひけり

笹鳴きの吉の神籤みくじを結びけり

梅ふふむこけし人形笑まひをり

身の丈に合ふお洒落かな水温む

騎馬警官や隅田七福神めぐり

針供養孫の世代に文を書き

スペードのクイーン手にせり春の夜

多くして

小野澤繁雄

みまちがいなりしか紅葉濡らしつつ雨降る空に青色ひとつ

顔半ば隠してあゆみこし者の女子なればなおブルカのごとく

バネなるに支持さる鳥が公園に口大きくし口は種別か

久々に顔を合わせるそのみに階段大掃除ササツと終える

掃除後に汁粉が出され「おのざわさんに多くして」声も自治会員

小公園「お」が付けられるお砂場より声かけられぬ少女ふたりに

みなりより男の子と思^もいしが不確かさバス降りてさき視野にし追いぬ

蛇口にじかに水のお少年に校庭は広し日のさすままに

ここにきて宅配便のドライバーさんにあうこと多し朝の仕訳に

路線バス回転場所にバスのありいくたりか座り運転手待つ

東京観光

河村郁子

あまりにも変化ゆゆしき東京に従^っいてゆけずに観光バス行

マイカーにて往来しているこの道を観光バスにて見るやあたらし

行程の恵比寿ガーデンプレイスに世界最大とうシャンデリア見る

品川のプリンスホテル最上階 眺望付きのランチバイキング

築一年ゲートブリッジより見はるかす東京スカイライン清しも

海辺より見上げるゲートブリッジに夕陽差しきて雄姿双なし

復原なる東京駅舎の赤レンガ照明やさし全貌おだし

丸の内ビジネス街の並木道電飾されて木木は超勤

久々の東京タワー展望台街の灯りに昭和とどめる

フィナーレはミッドタウンのイルミネーション青き光が宇宙へ誘う

鳥海山

布宮慈子^{やすこ}

広大な田を従へて出羽富士は秋田山形県境にそびゆ

チェロ弾きの座りたる椅子川べりに「おくりびと」のまま置かれてゐたり

鳥海山^{てうかい}を月光川^{ぐわつくわう}より望むとき豊かなる気があたりを包む

腸^{はらわた}を晒すがごとし鳥海南麓吉出山の採石現場

神の棲む山と思へば畏れむを金勘定に巨石をうばふ

山の神おそれぬ仕業つづくとき畏れぬひとに災厄は来む

遊佐町^{ゆざ}は湧き水の町 うまき米うまき魚あり恵みに満ちて

鮭^{うしわたり}のぼる牛渡川^{うしわたり}すきとほり水の深きが人を吸ひ寄す

水青き丸池様に潜りたるテレビクルーに龍神の祟り

なにゆゑに鮭のぼらんとす川堰を落ちてはのぼり上りては落つ

人感電球

丸山弘子

二週間溶けずか黒く残りゐるひねもす降りし成人の日の雪

東京に大雪の目安おそるるは「南岸低気圧ふたたび」のニュース

シクラメンの花すき通る新種なる「センドラビット」窓辺に置きぬ

一日中陽差し受けゐる記念碑のかたへの紅梅満開ちかし

結局はK電器店の言ふがままりビングの照明LEDに替ふ

消し忘れの多き洗面所の照明を人感電球にやうやく替へる

除湿器のたまりたる水捨つるため地下室への急な階段怖し

交差点を渡りたくなき犬頑として動かず 主人が支配されゐる

家族葬の告別の刻亡き義兄の顔の辺に置くカトレヤの花

つぎの世の義兄の名のりの簡素にて雄山一徑信士 棺の蓋閉づ

春の淡雪

結城 文

暗みゆく庭の隈みにささやかな生の実りのつはぶきの花

川水の域だけ黒き帯となり降る雪片を呑みて流るる

群れのなかの空しさよりは群れぬことの不安に耐へなむ春の淡雪

うらうらの雲のかたちを追ひてみつピンポン玉の会話聞きつつ

ほのぐらきわれの意識の源流をたづねむ双眸に藍を満たして

傾きて冬の日のさす川水にわが不確かな言葉をすすぐ

河川敷の夕べのしげみ鳥むらの羽音と風の遊べるところ

ゆづることについてしか慣れぬたわみつつゆく川のごとく海へ向かはな

いづ方も空と海なるあてどなき鷗よ信ずる方へ羽ばたけ

風のなか全き青を見つめみつ鳥むらは過ぐ祈りはるかに

辻井喬『西行桜』『竹生島』

新関伸也にいげき

「老人が竹生島を守護し琵琶湖を取巻く地域に住む人々の安全を司る龍神であり、遠藤佐智子が観音寺の本尊である弁財天であっても少しもおかしくなくなってくる。そんな世界に身を委ねることができれば、私は和船に乗ってゆらゆらと天の竹生島に昇ってゆけそうな気もする」

この『西行桜』に収められている「竹生島」ちくぶしま「野宮」「通盛」「西行桜」の四編は、すべて能に素材をとった幻想的な現代小説で、近江を舞台にしたのが、この「竹生島」である。

能のあらすじは、こうである。――朝臣（ワキ）が竹生島に詣のために、竹生島の見える湖岸にたどり着くが、おりしも老漁夫（シテ）と女性（ツレ）を乗せた小船がおり、便船を頼みこむ。その舟は島に着き、老漁夫は朝臣を社殿に案内する。しかし、女人禁制の島に女性も同行するのを不審に思っていた朝臣に、その女性は弁財天の徳を讃え、人間でないことを明かす。やがて女性は社殿に、老人は湖中に姿を消してしまう。暫くすると社殿は鳴動し、弁財天が姿を現し天女の舞を舞う。月が湖上に澄み渡ると、龍神が出現し、金銀珠玉を朝臣に捧げ、衆生済度、国土鎮護の誓いをあらわす。そして、弁財天は社殿に、龍神は湖底の龍宮に姿を消していく。――

辻井はこの能を下敷きにして、ワキに妻の死を機会に長浜に移住し設計事務所をはじめた主人公をあて、シテを隣家に住む竹生島神社の宮司であった老人、ツレにその老人の姪、佐智子を登場させる。主人公の日常と幻想が交錯する中でこの二人は妖しくも哀しい存在として綴られていく。一方、長浜で知り合った教会の司祭は神仏信仰の地にアクセントを与えるワキツレ役として配す。

ただ、この小説を読む者が、能を手本にしていることを理解せずとも十分味わい深い短編になっていることは、いうまでもない。

ところでこの作者、辻井喬こと堤清二は、西武グループ代表を務め、実業家でありまた作家であるが、堤家のルーツは近江である。清二の父、堤康次郎は明治二十二年、愛知郡秦荘町の貧しい農家に生まれ、苦学して早稲田大学を卒業後、一代にて西武グループを築き、また衆議院議長まで務めた実業家兼政治家であった。戦前から戦後にかけて、別荘や

宅地開発、鉄道、百貨店などを多角的に経営し、その豪腕ぶりは「ピストル康次郎」の異名をとる。その遺産を相続した息子であったが、清二は妾の子として生を受けている。このことが、作者の生涯に影を落とし「父との確執と、父への理解」が一貫した小説家としてのテーマとなる。

作者は、学生の頃は謡曲集のドラマにリアリティを見つけ出せずに惜しい時を過ごしたと述べ、能の幻想と劇的空間からなる緊密な文学的空間は、現代の小説よりもはるかに現代的な作品であると述べている。とすれば、深読みしてこの「竹生島」も自らのルーツと愛憎渦巻く父へのオマージュに思えてならない。

時間

松井淑子

時間とは何だろう。このところ、こんならちもない疑問に取り付かれている。

ことの起こりは、友だちの十三回忌の法要の案内を受け取ったことにある。十三回忌と知って愕然がくぜんとした。私の頭の中では、友だちが亡くなってからせいぜい五、六年しか経っていない勘定だったからである。

このごろ、時間の進み方が、どうも速すぎる。

私の友だちに、若いころ、商社勤務の夫君についてイギリスで何年間か暮らした人がいる。先日、その友だちとおしゃべりをしたときのこと、あまりこと細かにイギリスでの出来事について話すので、最近またイギリスに出掛けたのかと思ひ、そのむね尋ねると、友だちは、ハツとしたような顔で宣のたまわった。

「あら、イギリスから帰ってきて、もう五十年も経っているんだ。ついこの前のことだと思っていたのに」

時間の進み方に違和感を感じるのは、どうやら私ばかりではなさそうである。

むかし私の祖母は、日がな一日、自分の部屋の大きな四角い桐の火鉢の前でつくねんと座っていた。用事とっては、食事のために日に三度、茶の間に出ていくことぐらいで、あとは床の間の花を生け変えたり、たまに尋ねてくるお客と茶飲み話をするのがせいぜいであった。そんな祖母を見て、私が、退屈ではないのか、と尋ねると、祖母は言ったものだ。

「退屈なんてとんでもない。アツと言う間に一日が経ってしまう」

いまではこの気持がよくわかる。

子供のころはそうではなかった。時間の進み方がのろくて、その分一日が長く感じられ、ことに雨降りや戸外に遊びに出られない日は時間を持て余し、「退屈だ、退屈だ」とわめいて、親たちからうるさがられたのをよく覚えている。

また、母親に何かをねだり、「それは、あなたが大人になってから……」と、やんわり拒絶されたときなどは、大人になるのは遙か何十年も先のことのように思われて、がっかりしたものである。

子供時代の、たとえば五年間は、子供の気持からすると十年分ぐらいの長さを感じられるのかもしれない。反対に年をとってくると、十年間がたかだか五年分ぐらいにしか感じられなくなるようである。

思うに時間には、実際の物理的時間のほかに、心理的というか心で感じる時間があって、こちらのほうは年齢によって進み方が違ってくるのではないか。最近、そんなふうに思えて仕方がない。

植物事情

加藤文字

素材を求めて歩くことも少なくなった。

独立当初はいろいろな植物を育ててみたくて、あちこち捜したものだが、このごろはよそで購入することはめったにない。

長い間に増えたり減ったりしてきたけれど、毎日難なく個々の盆栽の表情がうかがえる適量があるようだ。

そんな中、これで充分、そう思っているでも「試しに育ててみては……」と知人たちが新しい植物を送ってくれることがある。

自ら増やしたいとは思わなくても、このために植物を見つけてくれる気持ちがあるの、意図しないめぐり合わせというものに興味もあるので、送っていただく植物の大半は育てることになる。頂きものの中には、変わった来歴を持つ植物も少なくない。遠くインドやチベットから研究のためもたらされたもの。あるいはミニチュアローズなどはイタリヤから種を送ってもらい、実生から育てて三十年にもなる。それもひと袋に種がミックスされていたので、白やピンク、クリーム色など異なる色彩の花を小さな鉢の中で楽し



むことになった。

ミルテに似たブラジルの植物も健在だ。

それらの多くは、私が盆栽園や園芸店を訪れたとしても、出合うことはなかったのではないかと思える植物たちだ。

あるガーデナーが送ってくれたペロニカオックスフォードブルーもそのひとつ。ゴマノハグサ科で原生地はトルコかコーカサスの方であるらしい。ガーデニング用の素材として入手したとき、葉も茎も細かいつくりをしているので、小さな鉢でも育つのではと思いつてくれたのだそうだ。

初めて見る植物でありながら、名前が親友の *Veronika* と同じだったので親しみがもてた。初夏のことですでに花は終わっていたが、先々が楽しみに思えた。

真夏になると茎がだらんと垂れ下がってきて潑刺^{はつらつ}さを失った。性質を知らないの、この時は心細くなった。

ところが秋を迎えたころから根元に小さな芽を現し、冬には充実してふくらんでいた。

夏は休憩、秋から活動を再開、そんなふうに捉えることにしよう。

まだきびしい寒さが残るとはいえ春のけはいが漂いはじめると、赤紫色の茎が伸びてその先端から小さな紫色の花がこぼれるように咲き出した。春の息吹と一緒に光に透けてサファイアのような輝きを放つ粒が鉢からあふれ出ている。

長い冬が少しずつ遠ざかる。スキップしたくなるような気分が湧いてくる。

送られてくるものの中にはむつかしいこともあるけれど、見知らぬ植物の到来は経験をゆたかにしてくれる。

対詠 ごきげんいかが？ PART45

O N M
丸山 弘子
布宮 慈子
小野澤 繁雄

見舞ひたる吾に冗談を言ひくれし義兄なりそれより三日のいのち 12月28日 M

2013年

元日のゆるびて雨になりたるを安堵の面して雪国ここは 1月4日 N

元日の朝のしずかさ対岸の家居の人の声もしきこゆ 1月5日 O

灯れるは馬場香嶺堂のみ元日の夕べワンコインのハーブが並ぶ 1月8日 M

生きぬるか否かわからぬ草なれど寒きベランダにローズマリー育つ 1月14日 N

みずいろの家とわが呼ぶアパートに六室のうち人住むは二室 1月17日 O

地震後は敬遠されぬるとふ木造のアパート入居者のいまだ決らず 1月22日 M

山形の穀倉地帯・庄内に地吹雪ツアーあるとふ事実 1月31日 N

白いか紅いか判るていどになったとキャスター梅の荅に 2月1日 O

定位置ときめてゐるらし鶴一羽けふもいちやうの高きにて鳴く 2月10日 M

真白なる世界に戻りぬ 夕空を鴉も帰る県道二十号 2月16日 N

押しボタン押して一人の中坊がみち渡る間をおしまる車ら 2月19日 O

自動車をやりすぎし渡る猫ながら左右の安全たしかめてのち 2月23日 M

雪掃きの終へたるこみち通る尾は隣り家の猫 日課のごとく 3月1日 N

ひと駅の間雪は雨にかわって高坂は雪、北坂は雨 3月2日 O

暖かさつづき隣家の壁際の沈丁の白、盛りと咲けり 3月12日 M

●水の心もてあましつつみだれ雲水の袋のわが見上げぬつ

結城 文

水の心は、水のような心か？ ここでは、しまいに置かれた歌の「白骨樹」のように、すでに冷え冷えとして動じるところのないものとして、そのことをもてあましつつ、と詠う。雲があり、それがたまたまみだれ雲なのだ。水の袋のわれが見上げている、という。何か対比的なもの、構成をここに読むが、同時に、なお生々とした主体の振舞のようなものが感じられた。

一連「水の心 水の袋」は、頭から九首目までが水の関わりの歌で、順に、雨音、みだれ雲、颱風、驟雨、水、波、紺青の水、冬の湖、淡海の湖、となっているが、通しては明暗に富む歌々だ。

十首目に置かれた歌は、つぎのようなものだ。こちらは火。ここで詠われようとしているのは火の心、だろうか？

沈む日の光をうけて白骨樹今にもぱつと燃え出しさうなり

●一ゲーム目は調子が出ないとそれぞれに言い訳をして競技は続く

池田桂一

それぞれにといっていて、一人にかぎらないところ、しかも互いに言い訳であることをしっていてなお口になっているようなところ。場面として正確なのだろう。

ゲームは、一首目からG・Gグラウンドゴルフとされる。同じ一首目から、毎週月曜日の半日をつかっていることが判る。四首目からは、この集まりが「東長生会」といい、作者が副会長をつとめていることもわかる（コトバでは「副席」）。

次の歌（二首目）、

他人よりも早出をなして八本のホールポストセットは副会長わたしの仕事

この歌を含む四首がこのゲームがらみの歌で、書きぶりから、この会の規模、構成員、なかで交わされているやり取りまでもが眼に浮かぶようだ。

●長月は兄の一周忌 震災を経験ののち六月でゆきぬ

布宮慈子

十月は安達裕之の三回忌 大震災を知らず逝きたり
対句的な並び。だが、大震災をさかいに切斷があり、歌では、それぞれ死がそのあとさきであることを明示しているのみ、のようでもあるのに、安達さんの死は「大震災を知らず」で、やや遠く、個人の死と印象付けられるようだ。

一連タイトル「震災ののち」には、また、身近な猫の死が含まれた。

おほかたの猫のグッズは片づけぬ おまへが遊ぶかひなはずだつたサンルーム

震災ののちを生ききて文月六日われの腕かひなに眼を閉ぢぬ

前号作品短評B 〈慈子〉

●色変へぬ松や白抜き五つ紋

岩田都女

秋になれば木々の葉は紅葉し散ってゆくが、松は緑のままである。「色変へぬ松」は変化しないことのたとえ。最高の礼装としての五つ紋は、白抜きで染め抜いてあるようだ。すぐ前の句とセットで読んでみよう。

仙台平の袴を畳むさはやかに

仙台平ひらは、宮城県仙台特産の絹の高級袴地のこと。であれば、五つ紋は羽織であろうか。年を経ても変わらない衣服としての着物。その清々しさとともに、思い出を懐かしんでいる作者が見えてくる句である。

●雨の日の見守り隊のおじさんは長靴「濡れると寒くって」

小野澤繁雄

関東で、今どき長靴をはく大人は珍しいのだ。長靴に注目する作者、濡れると寒いから長靴なんだと、通りがかりの人に言うおじさん。「見守り隊のおじさん」というのだから長靴のもつ印象にぴったりなのだが、言い訳をしなければならぬほど長靴は現代に似合わない履き物になってしまったか。かなりの省略をおじさんのことばで補い、おもしろい場面を切り取った。

●秋の日の森に射しこし斜しやの光ふいに葉うらの空蟬うつせみ照らす

河村郁子

森という大きな場面から、斜めにさす光によって小さな葉っぱにズームしていく。歌の作りとして成功している一首である。「空蟬」ここではセミの抜け殻であり、さらに現世、この世の人をさすのだろう。秋の物憂い感じがよく出ている歌である。ただ「ふいに」は再考の余地があるかもしれない。次の歌も、抽象的なものと具体的な部屋の取り合わせがうまい。

あかときの風に精気をもどしたし仏間・居間へと言霊さがす

●わが分けしホタルの石路つはふき愛でゐたる版画家金澤氏武蔵嵐山に死す

丸山弘子

ホタルの石路はキク科の植物で、山野草として人気があるらしい。葉に斑が入り、蛍がとまっているように見えるのだという。作者は珍しい石路を版画家に分けてあげた。直接のきっかけはわからないが、作品展であろうか。植物を通してのつながりがあり、版画家の死がリアリティーをもった。

或る所懐

池田桂一

『NHK短歌』一月号の大松達知氏おまつたつはるの「短歌時評」を読んで、批評の難しさ、そして作歌上でも表現の大切さを痛感した。

〈震災読み〉について、だったが、その内容によっては、東日本大震災と結びつけて解釈されてしまったということである。

昨年のNHK全国短歌大会の大会賞と佳作の作品で、

自販機のひかりまみれのカゲロウが喉の渴きを癒せずにいる
たくさんの孤独が海を眺めてた等間隔にならぶ空き缶

の二首だが、震災の当事者の作品ではなく、山口県在住の木下龍也氏の詠草である。一首目は、国内には潤沢にあるはずの食糧や飲料が、被災地では手に入りにくかったこととの喩えとして。二首目は、津波被害にあった海辺の街の光景として、選者の批評があったという。作者と批評者の立場によっては、とり方が異なるということの結果を述べていた。

作品は、発表されてしまうと、読者によって、その個々の経験的解釈によって、ひとり歩きをしてしまう、という危うさもはらんでいるということである。

上田三四二は、批評することに慎重派であった。歌会などでは、直接本人と向き合い、作意を聞き返して、そういうことならこんな語句があるとか、類語辞典をひくようにとか、サゼッションを与える形で、あくまでも本人が言葉を選ぶようにとの心遣いをしていた。作者の意図を確かめずに添削をしてしまうと、その作品は三四二のうたになってしまふということからだった。

よく歌会などで、添削を受けた作品を、よくなったといいなから、自分の作品のように勘違いをして、歌集に入れているのを見かけたことがあるが、読者に好感度を持たれる喜びがあったとしても、自分の意図した詠草から、外れてしまうのであれば、もう一首を作る勇気や苦勞が、必要なのではと思うようになった。

片づけ

小野澤繁雄

松戸から電車を乗り継いでくるあにさんを、高崎駅東口で待つ。そんなことをここ一年くらいして、母の家の片づけに群馬を往復した。合流しての片づけは、大抵休日になった。

母は、松戸のあにさんの家でデイサービスに通う日々をおくっている。

駅の一般車用レーンで待つことになるが、ケータイを持たないから少しやかいだ。人身事故で遅れがでたときなどは、相当待たされた。そういうこちらは、十七号線を二時間かけて北上する。高速は高崎インターを下りてからが苦手だったし、軽のバンは風に弱かった。

昼をどうするか？ このところは駅ナカであにさんがえらんだ幕の内を、母の家にもう一步の距離のコンビニ駐車場で、後部座席にやらんで食べた。具材をえらんで盛り合わせることができるそう。空は、故郷の空だ。

ガス、水道は止めていて、電気のみきているので、着くとブレーカーを入れる。トイレも使えないから、片づけは短時間勝負だ。

冬の間、庭草はのびない。それでここ数回は、押し入れの片づけに集中した。母がいれば、片づけそのものできない。ほとんどが処分できるもので、写真や何か、大事なものがないかどうか？ その判断が、あにさんに言わせると、二人だとしやすいという。捨てられず、残ってしまったものには、母の心組みがあらわれていて、それらにむきあうことには、心苦しいものがあつた。

まとまったものは、その日に持ちかえることができるゴミか、後日、あにさんが単独に平日きたときに、市のクリーンセンターに持っていくもの、かになる。

クリーンセンターでは、母の家にとどいた郵便物などの提示を求められたが、市には今も固定資産税を納めている。

人が住んでいない家内は何か荒^{すさ}んでいて、家というのは、住んでいるから住めるんだな、と口にしていうと、あにさんもそうだな、と云う。

裏から川に向かってくだつてゆく道の途中に、父の墓がある。お彼岸のあとなどでは、枯れた花枝などを片づける。今はまだ、草はのびていない。

故郷も墓だけ（といった関わりになった）と、これは、あにさんの同級生の話だ。

帰路も、高崎駅東口であにさんを降ろしたが、帰宅してからも、ゴミの始末が残っている。

雪掻き用スコップ

河村郁子

平成二十五年一月十四日には予想外の大雪に見舞われた。

私の家にとつて積雪は殊のほか大儀である。練馬区内の住宅地に五十年来居住しているが、ほとんど毎年のように重労働を体験している。

家屋は、住宅地でも四つ辻に面しているので、北側と東側の道路の除雪が必須である。北側には二台用の車庫が縦列しているため、車の出入りには四メートル近くの道路幅いっぱいぱいの除雪が必要である。

それに今度は一月の雪である。除雪をしても、道路面が濡れていれば、運転や交通の安全を脅かす。

四つ辻に面している四軒のうちの二軒は頼もしいスポーツマン一家である。今は体育大の教授を退任した先生ご夫妻と息子さんさんが住んでいる。

午前中激しく降っていた雪が午後になって雨に変わった。その時を見計らっていたかのように、成人の日であったので、自宅にいた社会人の息子さんが出てきて、ご自宅の南面と西面と十字路の雪を退けて下さった。その上に私の家の門扉から車庫までの歩行通路も付けて下さった。

私もただ手を拱しまねいていたわけではない。

翌日締切の原稿を出すため、長靴をはいて、ポストまで投函しに行った。スマホには千三百歩弱と出していたが、降雪中であったため傘は重く、足取りも重く感じられた。思わず「年取ったなあ」と呟つぶやいてしまった。

帰って一休みしていると、外で雪掻きをしている音が聞こえてきた。

急いで装備を整えて、二本の雪掻き用の、黄色いプラスチックのスコップを抱えて外に出た。まず、雨水桝の蓋を持ち上げて、近くの雪を押し込むのである。雪の置き場には毎回困るので、私が考案したのだが、今日の雪には歯が立たない。塀へいに寄せて積むしかない。

外の気配で、西と北の道路に面している家の人も出てきた。

まだ幼稚園児がいる若い奥さんである。持っているのは、先の尖った園芸用のスコップである。まだ新居で二年目の雪である。

先輩ぶって、

「二階の兄が使っていましたが、歳をとつてもう雪退けは出来ませんから空いています。良かったらつかってください」

と、雪掻き用のスコップを差し出すと、この申し出を喜んで、気持ちよく使ってください。普段のご挨拶以外の会話も楽しめた。

まだ雨が降っているし、今夜も雪が降るとの予報なので、歩行通路が出来たところで止めることにした。

「よかったら、ここに置いておきますから、明日の朝、自由に出して使って下さい」と言つて、門扉を開ければすぐに手が届くところに二本とも立て掛けておいた。

次の日は快晴である。母がよく「雪の翌日は着たきり雀の洗濯日」と言っていたのを思い出してしまった。

北側に生ゴミを出して道路を見ると、凍結している。昨夜は雨も降ったので、氷の板になつている。ヤレヤレと思ひながら東側の雨戸を開けに行つた。

まばゆい太陽の光が差し込んできた。神々しいほどである。

吾にかえつて前を見ると、門扉が開いている。

昨夜は私のあとに外出した人はいない。おかしい。すかさず、置いておいた雪掻き用のスコップを見ると、

無い！ 二本ともない！

便利なように置いておいたのが悪かった。テレビでスコップはどこも売り切れだと放映していた。と、すれば私は見せびらかしたことになる。

盗られた方なのに、手が震え、朝食はおろか何も手に着かない。二階の姉に知らせると「二本ともないの？ 昔の泥棒だったら、一本は残しておくのにねえ」

幸いなことに、去年、風呂場と洗面所をリフォームした時に買ってあった、頑丈な鉄製で先が平らのスコップがあった。

道路にこびりついた氷の板を、梃の原理で剥がし、五十センチ四方くらいの大きさにして、手に持つて扉に立て掛けるといふ異例の除雪作業には、プラスチック製では到底役に立たない。きつとポロポロに割れてしまっただろう。

しばしば手を休めて、呼吸を整えながら体を反らせて見上げる冬青空は、天女になって飛びたいほど美しい。

夕食後は入浴剤の「きき湯」をいつもよりたっぷり入れてお風呂に入り、ほっこりと温かい冬の夜を過ごした。

「清紫会」だより

◆第101回 平成二十四年十一月十五日(木)、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉池田桂一・ある決意／大石久美・あるコンサート／小野澤繁雄・右岸を下る
／河村郁子・東京駅／林博子・地下鉄路線図／松井淑子・貸家札あれこれ

◆第102回 十二月二十日(木)、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉大石久美・別れ／林博子・柿生の里

◆第103回 平成二十五年一月十七日(木)、会場・文京シビックセンター三階B会議室
〈提出作品〉池田桂一・或る所懐／大石久美・あさくさ／小野澤繁雄・片づけ／河村郁子・
雪掻き用スコップ／林博子・ローリング・ストーンス／丸山弘子・おとうと

(松井)

無二の会短信

◆室内に居て、手がかじかんできたので、コタツにもぐり込んだ。そして温もりでつい、眠ってしまった。玄關先で女性の声がするので目が覚めた。四班の理事のひとり、会員名簿の資料を届けに来たのだ。東長生会は、入会した平成八年の頃は、たしか百五十名を超えていたのだが、今年になって、とうとう百名を割ってしまった。少子化も大変な問題ではあるのだが、長生きをするようになったといつても、会員が減少していく現状は、地震国日本と同様に、打つ手はないのかも知れない。

一方、年末からお正月、ギックリ腰で外出も出来ず、ゴロゴロしていても、短歌作品はまとまらなかつた現実。他人の作品を読んでも、何の思いも浮かんでこない状態で、焦りの毎日を重ねて、締切日をはるかに過ぎてしまった。こんな言い訳で、今号は欠詠である。 池田桂一

◆この頃思い出すこと。三年二組の仲良し三人組は今日も靴磨きのおじさんの所へ寄り道をする。生憎、おじさんはお客さんの靴を磨いていた。目の端にチラと子供たちを入れながらお客と話を続ける。「こう不景気では干上がってしまいますよ。戦争でも一発起きませんかね」。その瞬間、私はおじさんが嫌いになった。「戦争だなんて。おじさん大嫌い」。私たちはおじさんから逃げた。ランドセルがカタカタ音を立てる。昭和十一年秋のこと。 岩田トメ

◆群馬の母の家にはだれも住んでいないので、帰省すると云えないような気がしている。ただ、故郷の山は変わらない。稲含山は、西上州の山域に含まれ、千メートルに満たない山だが、じぶんのなかでは大きな山だ。その姿がみえてくるたびに思うことは、啄木の歌の通りだ。 小野澤繁雄

◆東京生まれで東京育ち、東京在住の私が東京を観光するツアーに参加した。近くの練馬区役所を、十一時に出発して二十一時ころ同所に帰着するという手ごろな行程であった。去年竣成したばかりのゲートブリッジや四カ所のイルミネーションにも誘われた。練馬と新宿で全員が揃った。殆んどが中年以上の女性で、私のようなひとり参加も多かった。常連の人も多かったが、世間話は無かった。隣り合う場合に挨拶するか、バイキングの時に「これおいしいですよ」とか「デザートはあちらですよ」くらいであった。

不意に思いついて参加したツアーであったが、十時間ほどで立ち寄った七カ所はすべて自由行動であったので、集合時間と場所を守る緊張感も懐かしかった。初めて行った場所、素通りしているところ夫々にそれぞれの思いに巡れた一人旅であった。 河村郁子

◆映画『東京家族』を観た。小津作品を山田洋次がカバーした作品で、家族にとつての親とか、死とかを直接的に扱ってはいえるものの戦後の日本の姿を一方であぶり出している。駄目な末っ子の彼女が一番優しいのも、娘や息子がいるからである。独り身の多い今、あと何十年後に、この映画はどう思われるだろうか。 新聞伸也

◆山内ゆう子さんが久し振りにモンゴルから帰国されたので、正月二日、泉岳寺で待ち合わせて布宮みつこさんのお墓参りをした。お昼をご一緒にと思ったが正月のことでどこも閉まっており、唯一開いていたお汁粉屋でちよっとおしゃべりをしただけ。ゆっくりできなくて残念。

松井淑子

◆よく体がつづくと思うが、弟はゴルフ行きに余念がない。コンペなどもあるそうで、賞品や参加賞が出るという。例えば野田のコースでは、農協と提携しているのか、野菜果物が多いそうだ。現在共に一人住いなので、分けてくれる。生ものため、欲張っても消費しきれないのだ。こちらとしては大いに助かっている。

丸山弘子

◆今、中国のPM2.5という大気中の汚染物質について日本で話題になっているが、ここウランバートルの大気汚染もかなりひどい。ゲルと呼ばれる移動式テントで暮らす人々が暖をとるために石炭を大量に燃やすのだが、その煙がウランバートルを覆いつくし、視界は非常に悪い。年々、煙の被害は増しているらしく、マスクは欠かせない。夏の訪れが待ち遠しい。山内ゆう子

◆母と暮らすことになって、この家に住み始めてから十八年の歳月が経ち、何となく自分らしさの佇まいになったのだが、子供たちのすすめで、近く都内に転居することになった。東京生まれであるから、東京をふるさとというなら、故郷へ帰るということである。

結城 文

編集後記

◆ふるさとの山形に戻るとき、ひそかに楽しみにしていたことがある。いつか、清野弘也さんという方と出会えるかもしれないと思ったのだ。清野弘也さんをお見かけしたのは何年か前のNHK全国短歌大会でのこと。歌が選ばれて、清野さんは壇上におられた。ラクダと老いをうたった飄逸さが印象に残っている。しかし、清野さんは先年亡くなられたという。残念だ。あまりに残念がっていたからだろう、井筒屋さんが清野さんから贈られたいい歌集を貸してくれた。井筒屋さんは、清野さんが暮らしていた大江町 左沢の本屋さん。歌集の中に「雪晴れを来し目に暗き書肆……」という、井筒屋を詠んだのではないかと思う歌もあった。歌集から引いてみる。

『迪』清野弘也、平成三（一九九二）年一月刊

オリオンは遙かに低し雪近き高原の分校開く季来る

紅葉手にかざして兎らと歌いつつ山降り来れば河光る見ゆ

凍てし夜のざらめの如き雪を散らし散らしつつ帰る夜学果たして

理科室に吹雪のあとの月さして骨格標本影を正せり

逝きし母が次郎物語の読みさしにはさみ残せる紅き文字摺草

風邪に臥すわれの額におく妻の掌はつめたたくて紫蘇の香がする

夏逝けば最上川べり人無くて胡桃の枝に風渡るのみ

雪晴れを来し目に暗き書肆のうち眼馴らして詩集をえらぶ

あお墨にうぐいす餅と貼り出せる菓子舗の窓に牡丹雪降る

集荷場の夜を今日挽ぎし幾千のぶどうの房のほてりがこもる

月山も蔵王も晴れてかた雪の丘に林檎の枝うち始む

霧の中より不意に人影あらわれて確かめぬ間に霧に溶けたり

誰も居らぬ部屋に帰りてふるさとの林檎剥くらん離り住む子は

縄ないの車座に噂のまとなりし少女はわれのかたわらに老ゆ

そののちの昭和を奢り汚したる我らを死者ら許さざるべし

粽結う夜なべの妻がいまひとり生みたかりきと遠き目をせり

彫られゆく尉の面の細き目の彫る老いに似て互に見つむ

美しきもののみ見守り老いゆかなしるつめの花そこに吹く風

ほかにNHK全国短歌大会で最高賞の大賞を受賞した歌、二首。

峡の空に銀河傾くあかときを蚕ら淡あわと繭かけ始む

（一九九九年度NHK全国短歌大会大賞 受賞）

耳あてて幹に漲る水を聞く芽吹き of 山毛櫨は一本の河

（二〇〇二年度NHK全国短歌大会大賞 受賞）

どれも心に染みるいい歌だ。清野弘也さんは長く教職にあり、定年後は町の人と短歌の勉強会

をしたり、町報にエッセイを書いたりしていたようだ。朝日歌壇を教科書とも教室ともして作歌してきたという清野さん。歌集に挟んであった新聞の切り抜き（井筒屋さんの先代が挟んでいたのだろう）を見ると、わたしも清野先生に小、中学校のどこかでお習いしたかもしれないと思えてくる。『迪』は、ところどころに絵の入った美しい歌集であった。

◆岩田都女さんが体調の関係で展景をおやめになることになった。八十代の方から（失礼！）パソコンのメールでいただく原稿を楽しみにしていたのだが、致し方ない。展景には発表しなくても、これからも俳句をお続けください、お願いします。

（布宮慈子）

季刊 展景 69号

二〇一三年三月二〇日発行

編集・発行人 布宮慈子

オンライン版制作 堀 哲郎

無二の会・展景発行所

山形市上町二一―七―二〇二

muninokai.com